

## 小集団活動を通して患者の意欲とQOL向上を目指した 回復期リハビリテーション病棟の取り組み

施設名：博愛記念病院

発表者：石坂 拳志朗 (作業療法士)

共同演者：玉井 貞好 (作業療法士) 尾崎 麻結 (作業療法士) 中村 公紀 (作業療法士)

### 【背景】

当院の回復期リハビリテーション病棟(以下回リハ病棟)は、患者の認知度が異なるため、集団リハの内容を簡単なものに設定している。その理由から認知度が高い患者の参加率が低下し、院内生活において患者同士の交流時間が少なくなっているのが現状である。

### 【目的】

先行文献では、生活意欲、主観的幸福感とADLには関連性があり、その関連要因として、対人関係の重要性が述べられている。当院回リハ病棟において、認知度が高い患者に小集団活動を提供し、生活意欲と主観的幸福感の向上がみられるか検証を行った。

### 【対象】

認知症高齢者の日常生活自立度において自立からⅡa(社会参加に問題ない)に該当し、本人の希望が聴取された20人、平均年齢82.3歳(67-94歳)を対象とした。

### 【方法】

2020年2月から6月の期間を設定し週3回の小集団活動(40分)を提供する。

火曜日:体操 木曜日:コーヒータイム 土曜日:季節の作品作り

活動内容はアンケートを取り決定。

評価項目

①Vitality Index (以下VI)

②Philadelphia Geriatric Center Morale Scale (以下PGC)

③主観的幸福度(10段階)

を活動初回時と活動最終時に評価を行い、結果をWilcoxon符号順位検定にて比較し、統計的優位水準は5%未満とした。

### 【結果】

VI、PGC、主観的幸福度(10段階)の全評価項目において有意差を認めた。(P<0.05)

### 【考察】

山根らは活動を媒介とした集団内での相互作用により、他者との交流と意欲の向上を引き出すと述べている。今回の結果から、対人交流の重要性という点では、週3回の活動に参加することで活動時間は向上し、患者同士の交流時間が増えた。林らは生活意欲の高低はADLに関連する重要な因子と述べている。結果の関連性から今後は、ADLへの汎化がどのくらいあるものなのか調査していきたい。